

研究発表大会報告書

第33回国際P2M学会春季研究発表大会結果報告

実行委員長 千葉工業大学 小笠原秀人
実行副委員長 千葉工業大学 西田絢子

1. はじめに

国際P2M学会では、毎年、春と秋の年2回、研究発表大会を開催しています。今回は、4月23日(土)に千葉工業大学(千葉県習志野市)で開催され盛況に終了しました研究発表大会につき、ご報告いたします。春季研究発表大会主催者各位、学会関係者、一般参加者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

新型コロナウイルスの感染拡大状況を踏まえ、2020年春季研究発表大会から2021年秋季研究発表大会までの4回はオンライン開催でしたが、今回は、会場とオンラインのどちらからでも参加できるハイブリッド形式で開催しました。当日は、音声と映像の配信でいくつかトラブルがありましたが、発表ができなくなるといった大きな問題は発生せず、何とか最後まで実施できました。映像が途切れる、音声に雑音が入るといった問題がある中、最後までオンラインで参加してくださった皆様に感謝いたします。今回の経験と反省を、次回以降の開催にいかしていきたいと思っております。



千葉工業大学 津田沼キャンパス正門

大会の概要と大会趣旨は以下のとおりです。

<大会の概要>

大会テーマ：これからのプログラム
マネジメント教育

開催日：2022年4月23日(土)

発表会場：千葉工業大学
津田沼キャンパス7号館4階

協賛団体：7団体

研究発表：18題

参加者数：52名(会場 約40名、
オンライン 10~15名)

プログラム：研究発表、基調講演、招待
講演、パネルディスカッション

<大会趣旨>

日本においてプログラムマネージャという位置付けは、プロジェクトを推進するためのリーダーであるプロジェクトリーダーと比較して、定着・認知されているとは言い難く、故に人材層は薄く、その育成システムも確立されていないと考えられます。

本大会ではこのような問題意識の下で、「これからのプログラムマネジメント教育」をテーマに、さまざまな変革を推進するための中核となるプログラムマネジメントに焦点をあて幅広く議論します。まず、基調講演では、これからの教育設計において特に重要となる考え方について紹介していただきます。次に、大学、企業、公的な

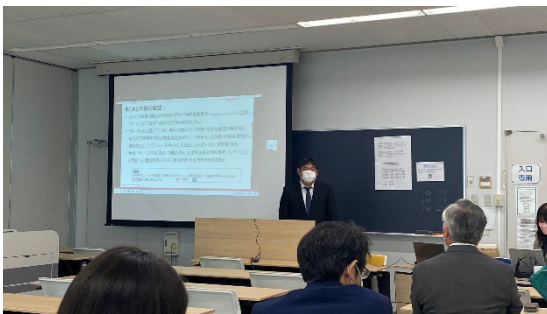
研究開発の各分野における人材育成について、それぞれの分野から識者をお招きし、現状の課題とその課題を解決するための教育内容について紹介していただきます。

2. 研究発表

研究発表は、A 会場～C 会場の計3 トラックにおいて、計18 題の発表があった。各トラックのテーマは A 会場「教育・人材育成」、B 会場「企業経営・研究開発」、C 会場「社会開発」として設定しました。



A会場



B会場



C会場 オンラインでの発表

各トラックのプログラムは、学会ホームページにアップロードされている資料（「2022年度春季研究発表大会」のお知らせ）の3ページを参照してください。

<URL>

http://www.iap2m.org/pdf/IAP2M_2022_spring.pdf

大会予稿集はJ-STAGEで公開されています。大会参加者以外の方は、J-STAGEからダウンロードをして参照してください。

3. 発表奨励賞

会場での開催の時は、午後の開会式で発表奨励賞の発表と授賞式が行われていましたが、オンラインで参加されている方々もいるため、発表奨励賞は後日発表としました。今回の受賞者は以下のとおりです。

A会場：教育・人材育成

常野一樹（セゾン自動車火災保険）

オンラインでのチームワーク能力向上の要因調査及びトレーニング方法の提案」

B会場：企業経営・研究開発

上條英樹（TDCソフト）

DX向けRPA開発フレームワークの拡張～複数アジャイルソフトウェア開発への対応～

C会場：社会開発

山本百合子（千葉工業大学大学院）

環境保全活動を通じた地域の共通価値「コモンズ」の創出

4. 基調講演

基調講演者

鈴木克明 氏（熊本大学 大学院社会文化科学研究科 教授システム学専攻 教授）

講演タイトル

教育の設計ができるとはどういうことか：ピンチをチャンスにこれからの創造するためのヒント

概要

コロナ禍によってあらゆる分野の教育実践が中断・変形を余儀なくされた。他方で、危機対応の中で「火事場のバカじから」とも言えるような様々な知恵が生まれた。「昨年通り」をずっと続けてきた感が強い教育実践をワンランクアップさせて、変化の激しい次世代に備えることを目指すのであれば、これはピンチではなく千載一遇のチャンスである。本講演では、あらゆる分野の教育実践を効果的で効率的で魅力的なものにするための理論やモデルを過去70年以上に及んで研究してきた教育工学、なかでも教育設計学（Instructional Design）の視座から、教育の設計ができるとはどういうことを意味するかについて考えてみたい。工学であるから、教育の効果・効率・魅力を高めるという目的を達成するために、与件が許す範囲で、活用可能な手段を組み合わせ、漸進的・全体的にアプローチしてきた。設計であるから、受益者に「こういう教育が欲しかったんです」と言わせることができるような新しい何かを創造することを目指してきた。本学会が直面する問題の解決に役立ててもらえることを願って、教育を工学的に捉え、設計するために構築してきたノウハウを紹介したい。

講演内容

概要にも記載されているとおり、教育設計学として確立されている考え方や手法の中から、プログラムマネジメント教育に役立つと考えられる内容を、事例を交えながら紹介していただいた。オンライン研修と

集合研修のあり方、企業における教育、教育を設計するとはどういうことか、といった事について、深く考える機会となった講演であった。



5. 招待講演

今回、これまでの参加者とは違う領域からの参加者を増やすことと、プログラムマネジメント教育の現状を知ることを目的に、招待講演を企画・実施した。招待講演のテーマは「研究支援機関と研究機関における研究開発におけるマネジメント教育」とした。招待講演者と講演タイトルは以下のとおりである。

招待講演者(1)

亀山秀雄氏（環境研究総合推進費 プログラムオフィサー）

研究開発マネジメントと研究評価について

招待講演者(2)

園部太郎氏（京都大学学術研究支援室
リサーチ・アドミニストレーター）

京都大学学術研究支援室(KURA)における研究開発プログラムー研究開発評価を實踐できるURA 人材育成を目指してー

講演内容は、研究支援機関と研究機関の研究開発におけるマネジメント教育に関するものであった。実践されている活動の背

景やこれからの社会動向を知ることができる貴重な機会であった。

講演は、亀山氏は会場で行い、園部氏はオンラインで行った。質疑応答も、会場とオンラインをつなぎ活発に行われた。ハイブリッドならではの効果を実感できたセッションであった。



藤井健視氏（国立研究開発法人 科学技術振興機構 科学技術イノベーション人材育成部 部長）

古畑慶次氏（株式会社デンソー 技術企画部、博士（数理情報学））

玉木欽也氏（青山学院大学 経営学部 経営学科 教授）

モデレータ

小笠原秀人氏（千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科 教授）

最初にパネリストの藤井氏、古畑氏、玉木氏の3名からそれぞれ約10～15分の発表を行い、その後、基調講演者の鈴木氏も含め、会場との質疑応答を交えながら活発な討議が行われた。

各パネリストの発表のタイトルを次のとおりである。

藤井氏

JSTにおけるプログラマージャー(PM)人材の育成の取り組み

古畑氏

デンソーにおけるデジタルアーキテクト育成 ～変革型リーダー育成コース～

玉木氏

事例研究：「未来戦略デザイン・ビジネスプロデューサー」育成に向けたハイブリッド型グループワーク演習と学習プラットフォーム

6. パネルディスカッション

基調講演で教育設計の基本や実践事例の内容をインプットしたうえで、「これからのプログラマージャー教育」というテーマでパネルディスカッションを開催した。登壇者は以下のとおりである。

パネリスト（順不同）

鈴木克明氏（熊本大学 大学院社会文化科学研究科 教授システム学専攻 教授）

上記の産官学の観点からの発表後、討論のテーマとして次の4つをあげ、それぞれの内容について深掘りをした。

- ・教育のゴールは？
- ・どのようにサポートをすればよいか？
- ・どのように環境を整えればよいか？
- ・何を教えればよいか？

教育のゴールに関して共通していたのは「課題を抽出でき、適切な方法を選択して解決できる」人材の育成ということであった。そのような人材が持つ力として、藤井氏からは以下の4つが紹介された。

- 社会ニーズを把握する力
- 新たな価値を想像する力
- プログラムを推進する力
- プログラムを管理する力

古畑氏からは、教育プログラムとOJTをとおして「技術（ソフトウェア工学を開発に適用できる）」「実践（開発課題に対して適切な方法を選択して解決できる）」「哲学（リーダーシップが発揮できる）」の3つを習得することが大事であり、そのためのサポートと環境を提供する必要があるという、実践経験に基づいた提言があった。デンソーで実施している教育では、課題形成、問題解決で実践したことを論文としてまとめ、学会へ投稿するという取り組みも紹介された。

何を教えればよいかということに関しては、玉木氏から計15回の講義「グローバル製品サービス戦略Ⅱ」が紹介された。これは、PBL（課題解決学習）でプログラムマネジメントを学習し、アクティブラーニング（協同学習）でプロジェクトマネジメントを実践し、最後に、P2Mを活用して事業構想書を仕上げるというものである。学ぶ内容と学び方をよく考えて教育プログラムの中に配置するというものの大切さが伝わ

ってくる内容であった。

テーマ毎に会場からの質問も複数あり、活発な議論が行われたパネルディスカッションであった。参加された方々は、何らかの刺激を受け、これからの活動に対するヒントを得ることができたのではないかとと思われる。



7. まとめ

今回は、研究発表大会としては初めてのハイブリッド開催であった。今後も、このような形式での開催は増えると思われる。ハイブリッド開催の場合、会場とオンラインの2つの環境を整える必要があるため、今まで以上に準備に時間をかけ、さらに当日の運営に気を配る必要がある。その一方で、参加者の方々にとっては、遠隔からでも参加できる、開催後に録画された内容を視聴して学習できるといった大きなメリットもある。学会として経験とノウハウを蓄積し、より良い研究発表大会が実施できるようにしていきたい。

(2022年8月24日 受領)